



TITLE:

東亞資源論の課題

AUTHOR(S):

蜷川, 虎三

CITATION:

蜷川, 虎三. 東亞資源論の課題. 經濟論叢 1942, 54(6): 630-644

ISSUE DATE:

1942-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131685>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷四十五第

月六年七十和昭

論叢

條件統制と需給統制

文學博士 高田保馬

廣域經濟の貿易理論

經濟學博士 谷口吉彥

東亞資源論の課題

經濟學博士 蜷川虎三

葉適の貨幣思想

經濟學士 穗積文雄

研究

儲蓄銀行の課題

經濟學士 徳永清行

テニルゴの歴史觀

經濟學士 出口勇藏

民國に於ける外國銀行の發展

經濟學士 小寺武四郎

說苑

支那工業に於ける株式會社企業の位地

經濟學士 岡部利良

附錄

彙報

本誌第五十四卷總目次

東亞資源論の課題

蜷 川 虎 三

學問的研究の分野においても、今日、東亞をその具體的問題とする研究が益々盛になりつつあることは寔に喜ぶべき傾向であるが、東亞新秩序の建設をもつて國家の使命とし、國民の信念とする限りに於いて、これまた當然のことといはなければならぬ。蓋し東亞の十分なる認識と理解および反省を缺いては東亞を動かして新なる東亞たらしめ、これをもつて世界を指導するがごときことは及びもつかぬことだからである。東亞新秩序の建設といふがごとき國家の大理想大使命の遂行に當つては一時的な思ひつきや空想的な手段が許されぬことはいふまでもないところで、是において政策はどこまでも社會の理法に適應するといふ意味において科學的でなければならず、また現實の社會に適應しその目的に對し最も効果的であるといふ意味において合理的でなければならぬことは當然である。而して、この政策における科學性と合理性の要求を満足しようとするれば、必然にそれが基礎としての對象の學問的研究を必要とするに至るであらう。

今日、東亞に關する學問的研究が盛になりつつあることも、まさにかかる地盤が存在するからであり、またかかる地盤においてこれに關する國民的關心が深いからである。わが國においても、一部の先覺者は早くもこの地盤の成立しました成立せしむべきことを洞察し、東亞の學問的研究の重要性を認め自らこれに挺身したのであつた

が、先覺者はどこまでも先覺者にとどまり、これに花を咲かせ實を結ぶまでに至らしめなかつたのは、地盤がそこまで成熟せず國民的關心の及ばなかつたためである。しかし今日においては、先覺者が先覺者として認められる時が來たと同時に、この時代を負ひその任に在る者は東亞の學問的研究に挺身し、學問的研究の役割を十分に果たさなければならぬ。徒らにこれを流行視し或は時流に乗つて學問的研究にあらざるものを恰もそのごとく裝ふことは、ただに世を誤るばかりでなく、文化の發展を阻止する大なる不徳の行爲といはなければならぬであらう。

しかし、かうした惡意に出發しないでも、研究者は往々にして研究の方途に迷ふ場合をなしとしない。例へば特定の問題をその研究の對象としてゐる場合、その問題にのみ囚れて、當該問題の全體的聯關性を見失ひ、したがつてその問題の意義や性質について客觀的な規定を與へずに主觀的な判斷を前提にして研究を進めるやうな過誤を犯し易いのである。更にこれを具體的に述べれば、例へば、今日南方における皇軍の赫々たる戰果に對し、南方に對する一般の關心の極めて深く強いものがあり、南方問題が喧しく論ぜられてゐるが、それらの多くの研究や論議において、われわれの不思議に思ふのは、いはゆる南方がいかなる地域を指し、またいはゆる東亞共榮圈（これもまたそれ自體必ずしも明瞭でないが）において、果していかなる關係と地位とをもつものであるかといふ點について明確な規定を與へてゐないことである。片々たる南方事情案内書ならば兎に角、いやしくも自ら學者を以て任じ學問的研究と銘を打つ限り、はたしてこれで満足さるべきであらうか。また今日、南方といへば資源といはれるごとく、南方と資源とは合言葉のごとき觀があり、資源についても種々の論議が行はれてゐるが、いふところの資源とは果して何を指してゐるのであるか、またその資源について一體何が問題であり、その問題

の中何を問題にしてゐるのか一向明らかでないものがある。恐らく何が資源であるかが明確に客觀的に規定されてゐれば、資源について何が問題であるかも自ら規定さるべき筈であり、したがつて、理論的或は實踐的要求をもつ限り、それについていかなる問題を捉へこれをいかに問題にするかも定められるであらう。資源に關する研究についてわれわれの要求してゐるのは、かかる明確なる規定の下に問題に答へた結論である。もちろん、何がどこに幾何あるといふことも確かに一材料には違ひない。また通俗啓蒙のために常識涵養上、便宜な方法や形式をとることに異存はないが、學問的研究も通俗啓蒙も一所にされては學問の進歩はあり得ない。

しかし、かうしたことは單に學問の研究のみにとどまるものではない。實際的問題としても極めて重要な意義をもつ。例へば最近南方資源の調査が問題になつてゐるが、南方資源の調査の重要性はその實際的要求より明らかだとしても、然らば南方資源についていかなる問題を調査しようとするのであるか、またそれについていかなる調査擔當者を選び、この調査擔當者をしていかなる調査方法を採用せしめんとするのであるか、少くとも一般的に調査方針を定めるために科學的な基礎が與へられなければならないであらう。ただ漫然と農林漁業或は鑛業の専門家を現地に送れば分るであらうなどといふ素人流の常識論では片附かないものがある。もちろん、専門家は専門家として何かを見て來るには違ひない。しかし、その何かが調査を計畫した目的に合ふか否かは全く別個の問題である。寧ろ調査の目的と調査對象の性質から全體として何を調査すべきかを定め、その各個の問題を全體的關聯において専門家に委すべきである。専門家を尊重し専門家を信頼することは大變いいことであるが、同時に専門家を活用し得るだけの調査における一般的基础を與へることが重要である。

かくのごとく、單に學問的研究においてばかりでなく、實際的な必要からしても個々の部分的な研究のみなら

す、これを含むところの全體的な組織的な研究が必要であり、かくして部分的な個別的な研究は全體的な組織的な研究に導かれると共にまたこれが内容を深め且つその意義を高めて行くことが出来る。東亞に關する學問的研究においても、その實際的必要から個別的な調査・研究が主として行はれることは當然であるが、しかしまた同時に常にこれら個別の研究を反省検討し得るに足る全體的な組織的な研究を必要とするであらう。かかる全體的組織的な研究の成果は獨立な一個の學問を組織し形成する。而して、かくのごとくして形成された學問は一定の對象について組織ある知識の一體として、對象について科學的認識を得せしめると同時に、その認識を更に深める個別の研究に示唆を與へこれを指導する役割を負ふものであり、またかかる性質をもち得てのみ學問は學問として成立し得るし、その存在の意義を主張し得る資格をもつ。

今日、東亞に關する學問的研究の重要な一面面として、かかる意味における學問の研究「即ち東亞に關する學問」の組織體系化の研究の存することはいふまでもないところである。而して一定の學問の組織體系化における根本的な課題は、當該學問の研究對象の明確なる規定と、この規定せられたる對象の理論的把握の方法ならびにこれに必要な諸概念の規定とであらう。而してかかる基本的なる概念によつて、またこれを通じて對象の觀察・分析・綜合が行はれ、對象が理論的に把握せられた結果は學問の内容を成すが、かかる内容が實質的に與へられるためには、先づその對象ならびに概念規定より問題にさるべき、また問題にされねばならぬ問題を一定の體系の下に提示しなければならぬ。而してこの提示せられた問題に解答を與へるのが當該學問における個別の研究に他ならない。かくして個別の研究の問題と意義は明らかにされ、これが實質的に答へられると共に學問の内容は豊かになり、豊富にせられた内容をもつて概念の規定および學問的體系に反省が加へられ、これは更に新なる問

題を提示するといふ反覆により學問は進歩し發達するのである。いはゆる學問の發展段階とは、これがいかなる程度にとどまつてゐるかによつてこれを定めることが出来るであらう。

もちろん、一個の學問の成立發展の初期の段階においては、殆ど理論的な基礎を缺き、單なる材料或は説明の集積に過ぎないと見られる場合が普通である。蓋しこの際においては、實際に事に當つて知つて置かねばならぬ事柄およびその説明を目的とし、未だ十分な對象の理論的把握にまで達し得ないからである。しかし、かかる段階に在る學問を以て、學問にあらすど斷定することは當を得たものではなく、寧ろこれに學問的反省と理論的檢討を加へてその發展を圖ることこそ望ましいことといはねばならぬ。したがつてまた、同時に學問が常にかかる段階にとどまつて學問的努力が怠られることは許さるべきことではない。この意味において、東亞に關する學問についても、不斷にかかる學問的反省が加へられ、個別的な研究が進められると同時に全體的組織的な研究が行はれる必要がある。殊に東亞に關する學問は、今日、東亞新秩序建設といふ斷乎たる而も必死の國策的要請に出づるもので、決して安易な道が許されるものではない。學問は學問としてその分野において東亞新秩序建設の役割をはたすものでなければならぬ。

東亞資源論も、かくして誕生したところの東亞に關する學問の一部門である。かかる學問が學問として要求されるに至つたのは、常識的な意味における「資源」が大東亞の建設において重要な役割を有し、したがつて東亞における資源に關する知識が必要とせられたからに他ならない。このことは、いふまでもないことである。しかし、資源についていかなる知識を授けたならこの現實的な要求を満足し得るであらうか。もちろん、このことは、第一に、現にわれわれが資源についていかなる實踐的な問題をもつかによつて答へられるであらう。蓋し實

實踐的な問題をもつがゆゑにこれを解決するために一定の知識を必要とするからに他ならないからである。しかしかうして實踐的な要求に出發して求むる知識がはたしてその要求を満足する知識として十分であるかどうかは全く別個の問題である。何となれば、假に一應さうした知識が役に立つものであつても、それは必ずしも對象たる資源そのものを理論的に十分に把握したものであるかどうかは明らかではないからである。したがつて、眞に實踐的に役立ち得る知識であるためには、それが十分に理論的であることを必要とする。換言すればその知識の内容が對象の性質並にその對象について問題にすべき問題を理論的に把握したものでなければならぬといふことである。

この意味において、東亞資源論も一個の學問としてその存在を主張せんとする限り、それが現實的な實踐的要求に基づくものとはいへ、單に實踐的な要求の一應の満足を目的とする實際知識の寄木細工的のものであつてはならない。もちろん、先に述べたやうに、學問の發達の初期の段階においては、かかる學問的要請を満足することは困難であり寧ろ不可能に近いが、しかし、この要請を看過し或は無視することは許されぬところである。東亞資源論においても、その誕生に當つて、かくのごとき學問的反省を加へつつ、その内容たる各個の問題の研究を進むべく、ここに問題とするところも、かかる意味において、學問としての東亞資源論の課題と見られる二三の基本的概念の規定を取扱ふものに他ならない。

二

東亞資源論は、その名の示すごとく、資源を問題にする學問であることはいふまでもない。然らば資源について何を問題にする學問であるか、先づこれを明らかにしなければならない。

しかし、資源について何を問題にするかといふことを定めることは、ただこれを定める限りにおいては容易なことであるが、問題を規定することが客觀的理論的でなければ、これを内容とする學問たる東亞資源論の理論的ならびに實踐的な存在の意義を主張することは出来ないであらう。蓋し、かかる根據を缺いては、それは學問ではなく單なる一個の創作に他ならないからである。したがつて、東亞資源論が資源を問題にするといふなら、資源それ自體において何が問題であるのか、而して、その問題の中特に一定の問題を選んで問題とせざるを得ない理由がどこに在るのか先づこれを明らかにしなければならぬ。資源それ自體において何が問題になるかを明らかにしようとするれば、それより先に資源自體が明らかにされなければならぬ。ところが、常識的な概念として日常用語で使はれる資源の意味はお互に明らかなやうに思はれるが、然らばいふ所の「資源」が何を指してゐるのかとなると必ずしも明瞭ではない。學問としてはこの「資源」の概念を明確に規定して出發することが必要である。

われわれの常識的な概念や日常の用語法においては、資源と原料とは必ずしも明瞭に區別されて使はれてはゐないやうに思はれる。ただ文字の示すごとく、資源は原料の供給源のごとく感ぜられ、原料に比して一般的或は根本的な意味をもつてゐるやうにも思はれるが明確に區別されてゐる譯ではない。その例としては資源愛護、資源開發のごときを挙げることが出来るであらう。また幾分學問的な取扱をしたものを見ても、資源が何であるかについて明確な規定を與へてゐるものはないやうである。而してそれは外國の文獻に示されるごとく専ら *Raw material* (der Rohstoff, les matieres premières) を問題にしてゐるのである。即ちその問題にするところは「原料」である。原料といはれる場合には、天然の儘の、手を加へない状態に在る材料で農林鑛業の直接の生産物を指

すのが普通である。また廣い意味においては、製造行程に使はれる商品で比較的手の加へられてゐないものが全て原料といはれてゐる譯である。

要するに原料は一定の生産に用ひられる素材たる物質で、最も普通の場合においては農林漁業および鑛業等の原始産業における生産物であるが、石炭液化による油、合成纖維、合成護謄或は樹脂のごとき工業生産物もあり必ずしも原始生産物に限られるものではなく、また高度の生産行程に使はれる原料は決して *natural crude or unwrought state* に在るものではなく相當程度の製造行程を経た生産物である。しかし、何れにしても原料が原料とされる限り、それが直接の消費の目的物ではなく、直接の消費の目的物を生産するための素材として使はれる物質を意味することは明らかである。斷るまでもなく、生産は社會的經濟的な活動であるが、生産の物質的技術的側面を見れば、それは人的エネルギーおよび物的エネルギーの結合に他ならない。したがつて、この意味からすれば、原料は物的エネルギーの一つの體現物に他ならないが、同時に他方、物的エネルギーは燃料その他動力といふ形をとつて與へられる。また人的エネルギーは勞動力として體現されてゐる。ゆゑに生産において結合されるエネルギーおよびその體現物を共に問題にする時には、單に「原料」のみではこれを總括することが出来ない。殊にこれらのエネルギーそのものとその供給源 (Quellen) とは密接不可分離の關係に在るものとはいへ別個の存在であり、これに關してわれわれの持つ問題も自ら異なつてゐる。したがつて、當然にこの兩者は分つて見るべきであり、また分つて考へらるべき性質のものである。その意味において、私は、勞動力、原料、動力などの形をとる人的エネルギーおよび物的エネルギーの供給源を總稱して「資源」と呼ぶことが適當であると考へる。

資源をかくのごとく考へるならば、これを原料と同一に見或は同一に扱ふことは適當ではない。もちろん、原

1) William F. Notz, "Raw Material" Encyclopedia of the Social Sciences, Vol. 7. p. 123.

料を問題にする場合、原料供給源(Rohstoffquellen)と離しては考へられない。このことはその原料を使つて造られる生産物と離して考へられないと同様である。しかし、また原料については原料自體の問題がある。即ち原料の自然的性質およびその社會的經濟的性質がこれである。原料の自然的性質については自然科學および技術の部門において研究されて來たことはいふまでもないが社會科學の領域においても、その生産、流通および消費の經濟的事情およびこれを制約する社會的・政治的・經濟的諸條件等の問題は戰爭經濟の問題として原料確保の見地から論じられて來た。また國際商品たる原料は、國際カルテルの問題として取上げられて來た。而して從來の原料論の問題の重點は、一般的にいつて、かくのごとき原料の社會的經濟的性質の究明とこれが對策にあつた。素よりこれは、先にも述べたやうに原料の供給源と無關係には論じられない問題であるから、決してこれを看過してはゐないが、しかしそれは、特定の原料問題に關する限りであつて、原料供給源自體に問題の重點を置いたものではなかつた。したがつて、原料供給源の問題を全面的に扱ふといふところまでは至らなかつたものである。況んや先に述べた意味におけるエネルギー供給源としての「資源」を全面的に問題にするものではなかつた。ゆゑに、原料の獲得確保が直接の問題であり、われわれの最大關心事だとしても、その問題の仕方は、單に原料それ自體ばかりでなく原料の供給源の方向からも在り得ること、および「資源」を問題にすることそれ自體に意義の存することは明らかである。

殊にわれわれの現實の問題としては、大東亞の建設途上における原料の獲得確保こそ重大で、その意味においては商品としての原料およびその流通の問題より寧ろ建設に必要な原料の生産獲得が重要な且つ根本的な問題である。したがつて、所要原料の供給源を求めてこれを確保し、確保せる原料供給源をして十分に原料を供給せ

しめることが必要で、これについて、いかなる方策を講ずるかが問題である。而して、これがだめには、原料自體よりも原料供給源の所在と性質および原料を供給し得る能力ならびにこれを制約してゐる諸條件を明らかにし、大東亞建設の大方針に即する原料需要の立場から適切有效なる方策を講じなければならぬ。即ちこれよりも明らかなるがごとく問題は原料供給源たる資源に在る。ゆゑに、先に述べたるがごとく、單に資源の方向から問題になし得るといふことにとどまらず資源について、また資源の方向から問題にする必要があり、また問題にしなければならぬのである。

右のごとく、單に原料のみではなく資源を資源として問題にすることは學問的にもまた實際的にも意義のあることであり、且つ重要なことである。ただ、この場合注意すべきことは、資源をもつて一般的にエネルギーの供給源であるといつても、ひろく自然を指す譯ではなく、國民經濟に直接的にその物質的基礎を授けるとするの自然のみに限る。

いふまでもなく、國民經濟は自然の地盤なくしては存立し得ないが、特にその自然の中から資源たる自然を區別するのは、一定の國民經濟がその保持發展のために直接的に必要とする物質的基礎を授ける自然だからである。即ち一定の國民經濟はかかる自然よりエネルギーの供給を必要とし、かかる自然と結びついてのみその經濟の保持發展を圖り得るといふ關係をもつ自然が當該國民經濟に對して資源たり得るのである。したがつて、これを自然の方からいへば、一定の國民經濟に對して「有用性」をもつ自然が資源であるといふことが出来るであらう。しかし、有用性の如何は、國民經濟の内容或は性質、したがつてその發達の程度によつて自ら異なるであらうし、また自然の探究およびこれが克服の程度如何、即ち科學および技術の發達に依存すべきことは明らかで、

有用性はどこまでも相對的なものである。

しかし、自然が資源たり得るためには、ただ有用性を満足するだけでは不十分である。蓋し、資源が資源たり得るためには、國民經濟の必要とするところの物質を供給することに在るから、いかに自然が有用性をもつてゐても、これが實際に國民經濟を満足し得るものでなければならぬからである。換言すれば、國民經濟に對しその有用性が發揮し得られることが技術的にまた經濟的に許されるものでなければならぬ。即ち「利用性」をもつものでなければならぬのである。この有用性および利用性に制約規定せられたる資源の國民經濟に對するエネルギーの供給し得る程度を「資源能力」と呼ぶことが出来るであらう。

三

資源能力を上述のごとき意味に解するならば、結局、資源における問題は國民經濟が現に必要とする資源を發見すること、資源能力が認められつつ而もなほその能力の發揮されざるものについてこれが發揮に努めること、即ち、「資源の開發」、現に資源能力が發揮されてはゐるがなほ不十分なものについてはこれが百パーセントの發揮に努めること、即ち「資源の利用」、および資源能力の衰退傾向に在るものについてはこれが「保護・育成」に努めること、等である。

資源は、先に述べたるがごとく、國民經濟に直接的にその物質的基礎を授ける自然であるが、同じく自然でも、(一)資源能力を有するものとして認められるものと、(二)資源能力の有無不明のもの、および(三)資源能力を有せずと「應認められるものとがあらう。これは専ら「有用性」の限りにおいて資源能力が問題にされてゐるもので、これを判斷するのは全く自然科学および技術の問題である。また(二)および(三)を(一)に進めるのは自然科学および技術

の研究進歩の力に俟たねばならない。

資源能力を有するものと認められても、これがいかなる程度に保有されてゐるか、(1)その能力程度の判明せるものと、(2)能力程度の判明せざるものがあらう。この判明せざるものについてはこれを探險し発見しなければならぬ。先に述べたやうに、資源能力は單にその有用性のみで測られるのではなく利用性をも條件とするものであるから、その探險は自然科學的な方向ばかりでなく社會科學的な方向からも行はなければならない。この場合技術的な問題を無視し得ぬことは斷るまでもない。從來、資源の探險調査といへば自然科學的或は技術的な部面のみから考へられたが、假令有用性をもつ自然の發見を主たる目的としたとはいへ決してそれだけでは十分ではない。

資源能力の現に判明せるものでも、(イ)それが現に發揮されてゐるために(資源の現有能力)その程度の明らかなもの、(ロ)資源能力は發揮されてゐないが(資源の潜在能力)探險調査によつて明らかなもの、とがあらう。後者については、その潜在的能力を發揮せしめ國民經濟に寄與せしむることが問題であり、これが即ち「資源の開發」である。資源の開發に關しては、潜在的能力を潜在的能力にとどまらしめてゐるところの技術的および經濟的の諸要因の排除克服が問題であるが、これらの諸要因の調査こそ「資源調査」の一課題である。また資源能力が現に發揮されてゐるものについては、現有能力は明らかであるが、現有能力をここに在らしめてゐる技術的ならびに經濟的諸要因についてもこれを明らかにする必要がある、これもまた資源調査の問題である。かかる資源調査に基づいて現有能力を保持或は向上せしめ得る餘地があるかどうか資源の利用の限界を明らかにすることが出来る。またこれによつて資源の保護育成の必要の有無も知ることが出来るであらう。

かくのごとく、資源能力といふ方向から資源を見れば以上のごとき問題があるが、かかる問題を國家的立場から解決し、資源をして國民經濟に十分にその能力を發揮せしめる方策が即ち「資源政策」である。この意味において、資源政策については、國家の意圖する方向が明確であるべきことは勿論のこと、自然科學、社會科學および技術の研究を土臺にして資源の探險および資源調査を行ひこれを前提にしなければこれが樹立および遂行は不可能であるといはなければならぬ。

以上に述べたやうに、資源について問題になるのはその能力即ち資源能力であり、これを探險調査し國民經濟上最も有効にその能力を發揮せしむることが資源を問題にする根本的な意義でなければならぬ。したがつて、東亞資源論が東亞における資源に關する知識を授けることを目的とすれば、その資源に關する知識とは、東亞における資源に關する資源能力および資源政策についての知識に他ならないといふことが出来るであらう。而して、資源能力については、既に述べたところのその意味から、自然科學、社會科學および技術の各方面より研究することを必要とし、また現にその専門の部門において關係の問題は研究されてゐる。資源論においては、これらの個別的専門的研究を土臺にし各種資源の各場合についてその資源能力を測定判斷し得るところまでこれらの研究成果を集大成しなければならぬ。しかし、實際問題としてこれは決して容易なことではない。殊に社會科學の領域において資源を問題にする場合においては、資源能力の内容たる利用性を制約するところの社會的經濟的諸條件を問題にし得るにとどまり、利用性を制約する技術的諸條件ならびに有用性については、自然科學および技術の研究に委せねばならない。而もこれらの自然科學的或は技術的研究は農學、林學、水産學、鑛山學、地質學或は工學およびその特殊部門において行はれてゐるところで、資源としての研究は寧ろこれを前提にして利用性

に關する經濟的研究こそ重要であるといはねばならぬ。

かかる意味における資源の經濟的研究の目的とするところは、單に資源能力を經濟の部面において研究するといふことにとどまらず、資源の發見・開發・利用・保護・育成を圖ることに在る。而して、資源能力を研究することも、要は原料・動力・勞働力を獲得確保するために、資源に對し適切にして有效なる方策施設を得ることに在るから、資源について、われわれのもつ直接當面の問題は資源政策に在る。この意味において、資源についてわれわれが現に要求してゐる知識の本體は資源政策に關するものであり、また資源政策における問題を明らかにしめるために必要な資源能力に關する知識である。而も從來政策に關する學問は多いが未だ資源政策を主體とする學問はなく、資源について現にわれわれの問題とするところを研究し、またこれに關する知識を授ける學問はその社會的必要にも拘らず生れてゐない。ここに資源論が一個の經濟政策論として誕生し存立し得る地盤がある。而も今日われわれの現實的な實踐的な要求としては、東亞新秩序確立建設の國家的使命と國民的信念の下に、東亞における資源をいかに開發利用して大東亞建設の目的を達するか、その資源政策を研究確立することに在る。したがつて、學問としての、その存在の實踐的意義を十分に満足しようとすれば、それは一般的に資源および資源政策を問題にするより寧ろこれを一應の前提として東亞における資源および資源政策を扱ふことが必要であり、またこの學問の成立の段階においては、かかる制限せられたる具體的問題より發足せざるを得ないであらう。しかし、學問としての一般的理論的な統一組織を望む限り、經濟政策論の一部門としての「資源論」が一個の學問として成立し發達する方向にその研究と努力が進められねばならぬことは當然である。ただ、かうした學問的體系と構想の下に當該學問の研究と組織とをその體系のいかなる部分より着手しまた着手し得るかといふ

ことは自ら別個の問題で、それはその學問の内容を成す研究の發達程度とその學問を存立せしむる社會的地盤によつて決せらるべき問題である。

以上に述べた意味において、私は、東亞資源論を以て東亞における資源に關する資源政策を研究する學問であると規定する。したがつて、東亞資源論は個々の資源の資源能力における有用性並に利用性の自然的條件を研究する自然科學或は技術學ではなく、これらの研究成果を利用しつつも専ら問題にするところは資源能力における利用性を制約規定する社會的經濟的諸要因並にこれが檢討の結果に基づく資源政策の研究を目的とするものである。ただ、ここになほ答へらるべき問題は、東亞における資源といふ場合における東亞の領域である。これについては紙頁の關係上別稿に改めて論ずるが、私は、他の論文においても觸れたやうに、この場合、東亞を以て日滿支一體經濟およびその培養領域即ち「東亞廣域」と解する。したがつて、東亞資源論の内容をなす主體は東亞廣域における日本の資源政策の研究である。もちろん、かうした結論を掲げるためには、東亞廣域の概念の内容としての「日滿支一體經濟」および「日滿支一體經濟の培養領域」の概念を明らかにしなければならないが、ここにはその餘裕がない。ただ私見を簡単に要約すれば、日滿支一體經濟とは、何も日滿支の各個國民經濟を解消融合して別個の一經濟を組織するといふ意味ではなく、日滿支の各個國民經濟は何れも日滿支の地域をその國民經濟の地盤として相互に協力するとともに、その相互協力および運営については日本の指導指揮の下に行はれるといふ廣域經濟の意味における一體經濟である。また日滿支一體經濟の培養領域とは、日滿支一體經濟の安全を確保しその保持發展のために必要とされる日滿支周邊の地域である。この意味において、培養領域そのものは固定したものではない。

1) 拙稿、東亞資源論(東亞政治と東亞經濟、昭16年7月)、南方資源論(東亞經濟論叢、昭17年3月)、廣域經濟論(科學主義工業、昭17年2月)。